

佳作

「大好きなんだよ」

福岡県 明治学園小学校 五年

梁瀬 実来

本当は大好きなんだよ。

こんなに簡単な言葉なのに、ここぞという時に、どうして出せないのかなあ。ふたつ上の姉とけんかをする度、いじ悪な言葉ばかりがホースで勢いよく水をまくみたいに出てしますのです。私が生意気な態度で傷付くようなことを言ってしまう度に、それで姉が最後には悲しそうな顔をしながら、わざと折れてくれる度に、本当は大好きなんよって、今伝えなきゃと思うのに、とても大切な言葉はいつもの奥でつかかかったように止まってしまうのです。まるで心の精と言葉の精までけんかしているみたいなのです。

昨年のクリスマス前、大好きだった祖父がなくなりました。私達姉妹をまるで日だまりのようにあたたかく包んでくれる祖父でした。まだ若かったのでまだまだずっと一緒に色んなことが出きると思っていたのに、もう二度とおやしギヤグ大会も山登りも男の料理作りも出来なくなってしまういました。新幹線で広島に帰る度、改札口でいいよというのに、きまつてホームまでむかえにきてくれて、スピードの落ちてきた新幹線のまどをキョロキョロしながらのぞきこんで私達の姿を探してくれる祖父を見るのが楽しみでした。ホームで祖父の姿を見つけると一番に走って行って飛びつきました。だけでももう二度と抱きしめてもらえないのです。なみだがあとからあとから出てきます。祖父に言いたいことが沢山あったのに、もうどんなに声をはりあげても届きません。楽しかったね、肩もんであげようか？ビールついであげるね。寒くない？またパジャマのズボンにシャツいれて・・・。

その時、ふつと手をにぎられました。姉でした。姉も泣きすぎて目が真っ赤になって、まぶたがはれていました。祖父の写真の前で二人で手をつないで泣きました。こらえていたけれど、姉が手をつないでくれたとたん、わあわあ泣きました。姉もわあわあ泣きました。

八月の終わりに北九州では、夜中ものすごいかみなりが明け方まで続きました。ベッドでふとんにくるまつて、うつぶせになってまくらを上から押し当てても家中がふるえるほどの音で、こわくてこわくて泣きそうでした。その時、姉がこっちにおいでと自分のベッドに入れてくれました。ひとつのふとんで姉のうでと太ももがくっついていて、こわくなくなっているまにかねむっていました。

私が悲しかったりこわかったり困ったりしていると、姉はそつと助けてくれるのです。姉がいるから笑えることなんてキリがないほどです。姉がいたから学校で守られていたことも感じます。ただ素直になれないのです。

本当に伝えたいことって、思うほど簡単には口に出せなくて、だけどちゃんと届けたいから、はずかしいけど

「お姉ちゃん。ありがとう、大好きよ。」